

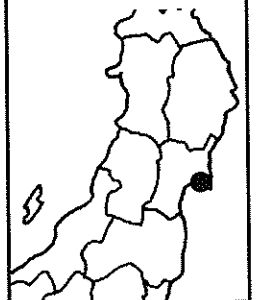


宮城県 女川町江島

ジャーナリスト
藤原 勇彦

第9回

90人、みんなで帰りたい 震源から一番近い島の願い



取材の時点で東日本大震災から、4カ月。宮城県女川町の中心部は、復興というには程遠い様相を呈している。おびただしがれきが仮集積場に運び出された後に、がらんとした空間が広がり、横倒しになったビルの錆びた鉄骨が地盤の液状化と津波の破壊力をうかがわせる。港を見下ろす20m近い高台にある女川町立病院前の広場には、今も死者を悼む花やカードが手向けられている。津波は、この病院の1階にまで押し寄せた。

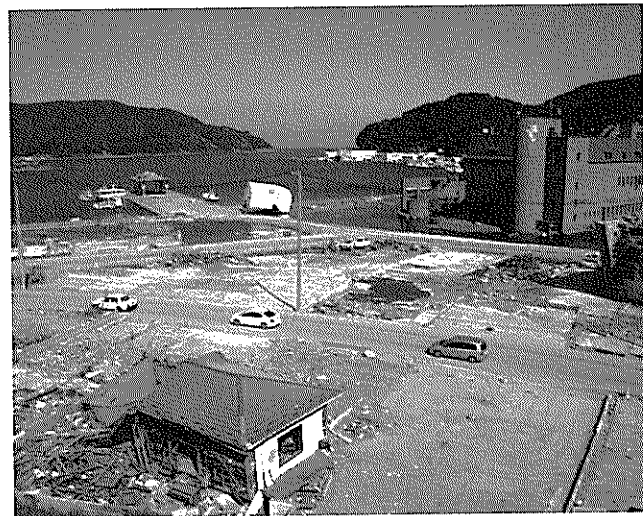


集められたがれきが谷を埋める。水面には海鳥が（女川町で）

その、女川町から東へ10km余の太平洋上、今回の地震の震源地域に最も近い離島と思われるのが、にほんの里100選の一つ、女川町江島だ。周囲4km弱、90人ほどが住むこの島は、震災の後、どうしているだろうか。新聞やテレビではなかなか伝わってこない情報を求めて、女川町を訪ねた。

■海の中が山のように見えた■

江島の住民で、県漁協江島支部長の稲葉



がれきが片付けられ、かえってさびしい印象のある女川町中心部

勝悦さんは、自宅でも女川町内でもなく、石巻市内の娘さん一家に、夫婦で仮寓していた。あの日の島の様子を訪ねると、「8月で73歳になるが、命のあるうちに、こんな未曾有の災害に遭遇するなんて、思ってもみなかった」と、何度も繰り返した。

あの日、平地が少なく山肌の家が張り付くような島に、「でかい揺れ」が2度襲ってきた。石垣が崩れたり屋根が壊れた家が出たが、けが人はなかった。自宅にいた稲葉さんは、2度目の揺れとともに、浜に下りた。女川町とつながっている島の防災無線が、大津波警報が出たことを知らせていた。浜で漁協の関係者や、働いていた人々を避難させ、自分も退避すると、そこへ未曾有の津波がやってきた。「海の中が山のように見えました」。いったん潮が引いて、普段は見えない海底の凹凸が現れたという。しかし、津波は島の急峻な地形の石垣にあたって、跳ね返るように退いていった。漁協の冷凍庫など海岸の建物は倒壊し、浜に置いてあった数十隻の船は流され、さらわれた軽トラックが湾の中に沈んだ。けれど、人々は高台に逃れて、無事だった。その夜から翌朝にかけ、本土の陸のほうから2階建ての家屋が丸々何棟も流れてきて、湾口を出入

りした。想像もできない光景だったという。

島では、電気、水道、電話などのライフラインが切れ、女川町との定期船も途絶え、外部との連絡が途絶した。「必要な時に携帯がつながらないのには、本当にがっかりした」。いざという時の避難所に予定していた江島開発総合センターも、天井が落ちサッシが壊れていた。震災の翌日、廃校になった学校から石灰を持ち出し、道路に大きく「SOS 100人 水がない」と書いた。その日のうちに、救援のヘリコプターが降りてきた。その後は自衛隊や米軍から救援物資を受け、数日間を島でしのいだ。高齢化の進む島では、子どもたちが本土で暮らしている例が多い。自分たちは生きることができたが、子どもたちはどうなったか。消息を尋ねる紙きれを、折るような気持ちで救援のヘリコプターに託したという。

■本土へ避難、各地へ分散■

結局、震災から5日経って女川町の指示で、島の全員が本土へ避難することになった。「こんな状況で、町としても島にいる人々を支えるのが、大変になったのだから」と稲葉さんは想像している。島民は、1人手荷物1個ずつを抱え、ヘリコプターに乗り、雪の降る中、避難所の女川第一中学校のグラウンドへ降りた。その後、3月23日で「避難所」を解散。子どもたちや親戚・知人を頼って石巻、仙台、東京などに散って行った。津波であまりにも

大きな被害を受けた女川町の避難所に、負担をかけないようにとの配慮だった。漁協からは当座の生活費を現金で支援し、それぞれには手紙で連絡を取りあうなどしているが、事実上「にほんの里」の一時的消滅ではあった。

江島の、震災にあう前の日常は、漁業の島。沖合を黒潮がながれ、季節ごとに様々な魚がとれた。アジ、サバ、イワシ、ヒラメ、スズキ、メバル……。高齢化が進んだ最近では、手近な海で出来る養殖漁業のウニ、ホタテ、ホヤ、ワカメも盛んだった。「昔は島中どこでも自家用に畑をつくっていて、それは綺麗だった。島の高みに登ると、『おらが江島は四方の眺めが絵のごとし』と父に聞いていた。今は笹が繁ってじゃまになる。笹なんて昔は焚きものだったのに」。島の隅々まで、手入れが行き渡らないでいたことを稲葉さんは残念がる。

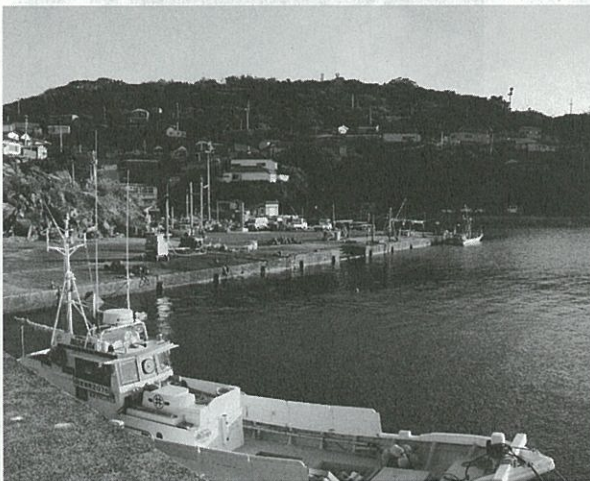
震災後、島のライフライン復活の手がかりは、まだない。島が1米以上沈下し、岸壁が水没し、定期船が近づけないからだ。稲葉さんらは国交省、女川町などに岸壁のかさ上げ、応急処置を働きかけている。町では、近々、小型船を借り上げて、島へ週1、2便の航路を再開し、秋までには土囊などを積んで岸壁を使えるようにしたいと計画している。

「島の復活の第一歩は接岸できるようにすること。その後、満潮時に冠水する道路の修復や、壊れた養殖施設の復旧なども必要だ」。漁業の協業、資材の共用なども考えなくてはならないかもしれない。「とにかく安心して

住める、大丈夫だよという状態にすること」それが稲葉さんの願いだ。

■安心して飯が食える■

このところ、石巻近辺にいる島の住民20数人は、ほぼ毎日、奇跡的に残った漁協の監視船を使って島に渡り、がれきの後片付けをしている。作業の合間に弁当を広げて緑の山を眺め、「ああ、江島はいいところだ」と実感するという。生まれ育った場所への愛着。島に帰れば、高齢者でも仕事があり、自分の力で生きる経済力を持てる。「子どもたちは本当によくしてくれます。何の不満もない。でも、帰りたいんです。出来れば、島を出たみんなと一緒に。安心してご飯が食えるから」と稲葉さんは言う。



震災にあう以前の江島。家々は海面よりかなり高い所にある